

2013年夏

福島を感じて考えるスタディーツアー

「スタ☆ふく」まちづくりツアー2013

～ “結” でつながる東和の「和」～

活動報告書

---

2013年10月

企画：スタ☆ふくプロジェクト



住友ユースチャレンジ・プログラム助成対象事業  
福島県「いいね！ふくしま」PJ委託事業

## 目次

0. 目次	1
1. はじめに	3
2. 企画背景	4
3. 企画趣旨・目的	5
4. 組織構成	8
5. ツアー詳細	10
6. 広報／メディア掲載について	25
7. ご協力いただいた方々	28
8. 総括	29
9. 問い合わせ先	31

## 1. はじめに

福島のリアルを感じてもらえるようなツアーを作ろうと、2012年4月から始まった『スタ☆ふく』のツアーも今回で6回目を数えることとなりました。「スタ☆ふくまちづくりツアー2013～“結”でつながる東和の「和」～」と銘打った今回のツアーは、33名のお申込みをいただきツアーを実施することができました。東和でのツアー催行は、私たちの団体では最多の3回目となります。昨年9月に実施したのが初めてで、毎回テーマを変更しながらツアーを作ってきています。これも本企画に多くの方のご協力いただいているおかげであります。そんな方々へ感謝の意を込めつつも、より多くの方々に私たちの活動を知っていただくべく、この報告書を作成しました。

また、弊団体は2013年4月に、母体団体であった『全国学生プロジェクト(JASP)』から『スタ☆ふくプロジェクト』として独立しました。これも団体を短期間で終わらせず、中長期的に福島の地でツアーを中心とした活動を続けていこうという意思の表れと自負しています。この報告書が、私たちの活動を知るきっかけとなれば幸いです。



参加者集合写真ーコットン畑にてー

## 2. 企画背景

「福島の実況を、実際に見て体験することで、福島への関心を深めてほしい。」という思いのもと、2012年4月JASP(Japan All Student Project)という団体の1プロジェクトとして発足し、企画されたのが“福島を感じて考えるスタディーツアー「スタ☆ふく」”でした。2012年度はいわき市・二本松市・喜多方市の県内3か所で計4回、参加者102名を動員するツアーを実施しました。福島のありのままの「リアル」を県内外に発信していくこと、地域と参加者をつなぐ架け橋となること、そして『地域活性化を支える旅行団体として存在感を発揮する』というビジョンを掲げ、2013年度も継続的に地域に根差した活動、ツアー実施にむけて活動しています。

今夏の「まちづくりツアー2013」は福島県二本松市東和地区で行われました。この地域でツアーを行うのは今回で3度目となります。二本松市で初めてツアーが行われた昨年の夏は福島の実況を伝えることをコンセプトに、二本松市の第一次産業に焦点を当てた「スタ☆ふく農業ツアー」を催行しました。野菜収穫体験を参加者自ら行い、線量を測定して実際にカレーを作って食べたり、地域の農家さんともたくさんお話したりすることで、メディアでは伝わってこない福島の実情を知り、考えてもらうツアーとなりました。そして、冬には地域の方からのツアー継続の声を頂き、酒造見学やしめ縄づくりといった地域産業や文化に焦点を当てたツアーを行いました。また、この時は地域の方が主体的にクリスマスコンサートを実施し、地域の方にとって新しい可能性にチャレンジできる場、主体的行動を喚起する場となりました。地域視点でのツアーのあり方の可能性が広がることのできたのは団体にとっても大きな発見でした。また、ツアー実施後の参加者アンケートでは両ツアーとも満足度ほぼ100%という評価をいただいております。今回はそんな東和地区で、震災後の様子だけではなく、もともとある地域の魅力、地方のまちおこしの様子を、「まちづくり」というテーマで、東和地区で生きる方々の姿、思いから感じ取っていただきたいと思ったことが、本ツアー企画実施に至った背景となります。

### 3. 企画趣旨・目的

二本松市東和地区は震災以前より、地域の方が主体となってまちづくりに取り組んできました。地方の過疎都市が抱える、「少子高齢化問題、若者世代の人口流出、第一次産業従事者の低下・・・」といった問題に常に自分たちで取り組み、行動を起こしてきたのが東和地区です。その実績は確かなもので、研究機関も注目する全国的にも有名な地域です。そんな東和地区に足を運ぶ中で、今、福島が考えるべき問題は「震災復興」のことだけなのだろうかと思うようになりました。震災以降、福島が「社会問題の集積地」として全国の注目を集めるようになってきているからこそ、被災地福島だけではない、地域の姿や思いを伝えたいと思うようになりました。震災があったという事実は、全国の他の地域と比べ、福島の地域振興においてマイナスのことだと思っていました。

しかし、震災があっても確実な実績を生み出す東和地区の姿は全国から見てもまちづくりにおける先進地域であり、注目されている今だからこそ、全国に発信していく必要を感じました。震災による影響は計り知れないものがありますが、それでも前に進みつつける人々がいる。その姿や思いを、東和が本来持つ魅力から感じ、考えて欲しい。地域によって異なる実情を知ってもらい、考えるきっかけを作ることで、震災による短期的支援だけではなく、福島の活性化そのものへの長期的支援につなげること、また外部から人が訪れることによって地域に新たな地域おこしの視点の提供・継続的地域活性モデルの創出を計り、発信していくことを本ツアーの目的としました。

### <企画目的>

- 参加者に福島の様子を知る原体験の提供
- 被災地・福島というイメージだけではなく、地域の良さに目を向けられるような意識変化の喚起
  - ・田舎の地域の良さの発見
  - ・新しい可能性を二本松に生み出す
- 地域(福島)の様子を外部に向けて発信する
- 地域と外部が今後もつながるきっかけづくり

### <企画目標>

- 定性目標
  - ・二本松に興味を持ち、問題解決と新しい可能性について考える姿勢を持ってもらう
  - ・復興支援も大切にしつつ、その先のまちづくりの視点を参加者・地域・運営者が持てるようにする
  - ・弊団体の存在意義を見出し、認知してもらう
- 定量目標
  - ・参加人数 30 名以上
  - ・参加者満足度 90%以上

## <企画コンセプト>

### ○東和を知る

被災地二本松と、もともと存在する地域の姿・特色について知る

### ○地域の人とつながる

顔が見える関係性により、東和を好きになってもらい、継続的交流、地域の発展につながる

### ○未来を考える

「震災から脱却したまちづくり」

これまで震災の影響というのは大きく、良くも悪くもまちづくりの根本になってきていたが、今後も存在していく地域の魅力を発見する。

「これからの地域のあり方を考える」

震災以前から抱えていた問題について考え、新しいアイデアを生み出していけるようにする。

※上記コンセプトは企画当初のものであり、目指すべきものとしては地域に対して、参加者による具体的アイデアの創出としていました。しかし、企画を進めて行く中で、今の地域に対して自分たちができること・参加者にとっての価値とは何か考えていく中で、地域の方の姿や想いを震災から3年目だからこそ参加者にしっかりと伝えるところに焦点を当て直すことにしました。企画コンセプトに変遷がありましたことを、合わせて明記させていただきます。

## 4. 組織構成

『スタ☆ふくプロジェクト』は2013年4月に母体団体であった『全国学生プロジェクトクト(JASP)』から分離独立しました。スタディーツアー事業の活動開始は2012年4月であり、これまで福島県いわき市、二本松市、喜多方市でスタディーツアーを実施してきました。全メンバーが福島大学の学生によって組織された組織で、2013年9月1日現在17名で活動を展開しています。

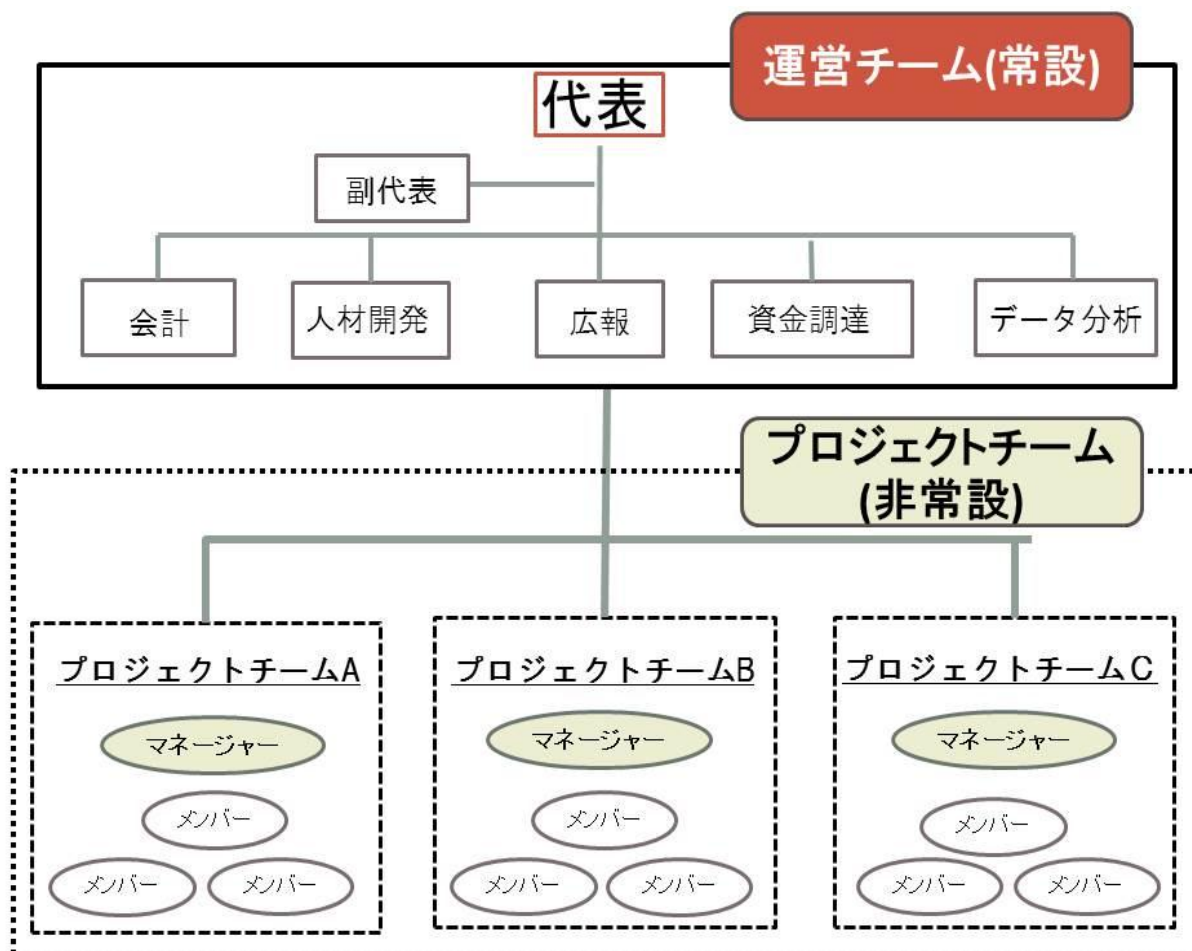
### 【ビジョン】

「地域を活性化させる旅行の成功事例として存在感を発揮すること。」

### 【受賞歴】

2013年6月 観光庁主催『若者旅行を応援する観光庁官賞「東北ブロック賞」』受賞

### 【組織図】





## 構成メンバー(2013年9月1日現在)

### ～運営チーム～

代表 吉田哲朗 人間発達文化学類 4年(会計・資金調達兼務)  
副代表 吉田江里 人間発達文化学類 2年  
人材開発 伊藤一輝 経済経営学類 4年  
広報 伊藤崇史 人間発達文化学類 3年  
データ分析 渡邊啓太 経済経営学類 3年

### ～活動メンバー～

青木悠里 人間発達文化学類 2年  
阿部詩音 人間発達文化学類 3年  
安斉舞 行政政策学類 2年  
遠藤はるひ 行政政策学類 2年  
岡部勇佑 行政政策学類 2年  
國分花菜 経済経営学類 2年  
鈴木晴香 人間発達文化学類 2年  
十日市大貴 共生システム理工学類 1年  
中野恵 人間発達文化学類 1年  
武藤茉奈美 人間発達文化学類 2年  
山川幸史 経済経営学類 2年  
横山可南 経済経営学類 4年

プロジェクト開始：2012年4月 団体発足：2013年4月

### 【過去のスタディーツアー～】

2012年8月 「スタ☆ふく水産漁業ツアー」 場所：いわき市 (32名動員)  
2012年9月 「スタ☆ふく観光ツアー」 場所：喜多方市 (27名動員)  
2012年9月 「スタ☆ふく農業ツアー」 場所：二本松市 (25名動員)  
2012年12月 「スタ☆ふく冬ツアー」 場所：二本松市(18名動員)  
2013年8月 「スタ☆ふく水産漁業ツアー2013」 場所：いわき市(37名動員)

### 【団体連絡先】

〒960-1296

福島県福島市金谷川1 福島大学学生課 「スタ☆ふくプロジェクト」

Mail : suta.fuku@gmail.com

## 5. ツアー詳細

<タイトル>

「スタ☆ふくまちづくりツアー2013 “結” でつながる東和の「和」

<実施日>

2013年9月07日(土)～9月08日(日)

<実施場所>

福島県二本松市

<参加者動員数>

計 35 名

<参加スタッフ>

鈴木晴香 (プロジェクトマネージャー・福島大 2 年)

山川幸史 (福島大 2 年)

國分花菜 (福島大 2 年)

吉田哲朗 (福島大 4 年)

安斉舞 (福島大 2 年)

岡部勇佑 (福島大 2 年)

吉田江里(福島大 2 年)

青木悠里(福島大 2 年)

伊藤崇史 (福島大 3 年)

伊藤一輝 (福島大 4 年)

<参加料金>

二本松駅発着：19,500 円

東京駅発着：22,000 円

## <参加者アンケートの結果>

○ツアー満足度全体平均 3.83/4 ポイント

### 【満足度】

	悪			良		
	1	2	3	4	計 (人)	平均
① ツアー全体		1人	4人	30人	35	3.83
② 料金	1人	1人	17人	15人	34	3.35
③ タイムスケジュール		2人	14人	18人	34	3.47
④ お食事			2人	33人	35	3.94
⑤ 宿泊先			2人	33人	35	3.94
⑥ スタッフ対応		1人	6人	28人	35	3.77
⑦ コンテンツ		1人	9人	25人	35	3.60

4⇒満足

3⇒どちらかといえば満足

2⇒どちらかといえば不満足

1⇒不満足

○ツアー理解度

### 【理解度】

	悪			良	計 (人)	平均
	1	2	3	4		
① 震災後の福島...			6人	28人	34	3.82
② 震災後の東和の...		1人	5人	28人	34	3.79
③ 東和の現状を...			10人	24人	34	3.71

① 震災後の福島において前進している姿を感じられましたか？

② 震災後の東和のまちづくりにおける実績、変化を知ることができましたか？

③ 東和の現状を理解し、地域の方の思いを感じることはできましたか？

## ＜参加者の声＞アンケートより抜粋

とても学ぶことが多いツアーでした。地元でも活かしていきたいと感じました。  
(男 20代 学生)

とても前向きな人たちが多く、とても楽しかったです。前進しているのは良いことだと思うのですが、震災については薄れてしまっているように感じました。過去を見つめすぎるのは良くないと思いますが、現在も続いている問題なので、県外からいらしている方々も多いので、福島の様子がもう少し分かればよいなあと感じました。

(女 20代 学生)

東和の人々の生き生きとした生活感・積極性などを直接感じることができ、元気をもらうことができました。東京には分からない人々の想いや放射線の現状などをなるべく多くの東京にいる友人に伝えたいと思いました。

(男 20代 学生)

本当に来てよかったです。楽しく、いやされ、心がほくほくしています。東和の人の姿を実際に目にして声を聞いて、目を輝かせている様子を見て、より安心したり、心強かったり、これからが楽しみになりました！友達と農民泊をしに来たいです。スタッフのみなさん、本当にお疲れさまでした。素敵なツアーを本当にありがとうございました。

(女 20代 学生)

若い世代の人が福島に関心を持つこと自体が、復興につながると思っています。今後はもっと広くPRしていくべきだと思います。

(男 30代 事務)

「人」に焦点をあててツアーを組んだ理由が、時間が迫うごとにわかりました。あまり話者の人数も増やさず、時間的ゆとりを持ってコンテンツを組んでくれたのでよかったです。3回目だからといって決して楽な準備ではなかったと思うけど、プログラム本当によかったと思いますよ。これからも応援してます。本当におつかれさまでした。

(女 20代 学生)

今年も良い時間を過ごせました。お疲れさまでした。どうもありがとうございました。

(女 50代 教員)

とても楽しみにしていて、期待を良い意味で裏切られました。楽しかったです。

(女 20代 学生)



↑地域の方と参加者との交流の様子

↓地域の方による講演会&最終コンテンツまとめのワークショップの様子




## <ツアー行程>

時間	行程	Comment
1日目 9月7日(土)		
7:30	東京参加者出発	スタッフが笑顔でお出迎え。
11:20	二本松参加者出発	“2日間よろしくお願ひします!”
12:00	昼食&自己紹介	<p>昼食を食べながら、一人ひとり自己紹介をしました。</p> 
13:00	講演会 「東和のまちづくりと農業」	<p>NPO 法人ゆうきの里ふるさとづくり協議会の 大野達弘さん 農家の 関元弘さんのお二人から、ゆうきの里の取り組み、東和地区の農業などについてのお話を伺いました。</p> 
13:40	お土産タイム	<p>道の駅東和で各自お土産を購入しました。</p> 
14:00	野菜収穫体験&コットン畑見学	3つのグループに分かれ、各農家さん

		<p>の畑で収穫体験。トマトやナスを収穫しました。また、東和地区で昨年栽培を開始したコットン畑の見学もありました。</p>  
16 : 30	<p>講演会 「東和が生んだ夢ワイン」</p>	<p>ふくしま農家の夢ワイン株式会社社長の斎藤誠治さんから、ワイン作りを始めたきっかけや震災の影響、今後の目標についてのお話を頂きました。</p> 
16 : 55	<p>ワイナリー工房見学</p>	<p>斎藤さんにワインの作り方などの説明をしていただきながら、ワイナリーの地下室などを見学しました。</p> 
17 : 30	<p>懇親会</p>	<p>参加者、東和地区の方々、スタッフを</p>





		<p>交えた BBQ! 料理は地域サークル「ハーモニー」で活動するお母さま方が準備して下さいました。参加者同士だけでなく、参加者と地域の方々との仲もより深まりました。</p> 
19:30	各農家民泊先へ	<p>参加者・スタッフが7つに分かれ農家民泊。民泊先の方々との交流は日付が変わるころまで続きました。</p> 

## 2日目 9月8日(日)

9:00	チェックイン	<p>参加者同士でペアを作り、現在の心境などを話し合い、一日を過ごす気持ちを整えました。</p> 
9:30	分科会①	<p>「ゆうきの里協議会」、「二本松農家」の二つのテーマに分かれてお話を伺いました。参加者は話者のお話に必死に耳を傾けていました。</p>



		
10 : 30	料理体験&ヨガ体験	<p>料理体験とヨガ体験をして気分転換！ 料理体験ではおはぎを作りました。</p>  
11 : 30	昼食	<p>お昼ごはんは料理体験で作ったおはぎや郷土料理の芋煮汁。前日に引き続きハーモニーのお母さま方が準備して下さいました。おいしかった♪</p> 
12 : 30	分科会②	<p>「農家民泊」、「あぶくま農と暮らし塾」の二つのテーマに分かれお話を伺いました。農家民泊のテーブルでは、参加者から問題に対するアイデアを提案する場面も見られました。</p>

		
13 : 45	まとめ・ふりかえり	<p>グループに分かれ、二日間を通して感じた東和の魅力、福島に対するイメージの変化を話し合い、お互いに共有しました。</p> <p>最後に「東和を一言で表すと？」という質問を各自で考えてもらい、数名に発表していただきました。</p>  
16 : 30	二本松参加者解散	“2日間お疲れ様でした！”
20 : 30	東京参加者解散	

## < ツアー担当者の声 >

今夏のまちづくりツアー催行によって、二本松でツアーを行うのは3度目となりました。これまでの実績を踏まえてのツアー催行には、正直大きなプレッシャーを感じておりましたが、多くの皆様のお力によって無事催行できましたこと、心より御礼申し上げます。

さて、5月に私が二本松ツアーの担当になった時、ツアーテーマに設定したのは「東和のまちづくり」でした。地域に何度も足を運び、お話を聞いて行く中で、地域の方一人ひとりが自分の住む地域に誇りを持ち、地域づくりに積極的に参画し、皆の手で作り上げていくところに驚きを感じたことがこのテーマ設定につながりました。震災があっても、皆の手でまちをつくりあげていく姿勢は変わることなく、着実に実績を積み上げていることにも驚きました。「震災があったからってね、私たちが簡単にこのまちを離れることは無いんですよ」と言った地元農家の方の私は忘れることができません。私は、震災があったという事実はまちづくりにおいて圧倒的に不利な状況だと思っていました。しかし震災があっても前向きに頑張る地域の方の姿はどこから生まれるのか、その姿勢を伝え、参加者の方に考えてもらうことこそ、震災から“3年目”の二本松地域から発信していくべきことだと思い、企画しました。

今回のツアーを企画・実施することで、多くのことを考えることができましたが、特に「ツアーという手段による価値づくりとは何か」「二本松地域における活性化とは何か」を考えることができたのが、自分にとっても団体にとっても大きな転換になったと感じております。企画当初は地域の魅力を参加者に感じてもらい、東和地区がもっとよくなっていくためにはどうすれば良いのか、意見を出し、地域の方に提示してもらうところを目指しておりました。しかし、それが本当にこの滞在期間で可能なのか、またツアーという手段を用いて行うことなのだろうかという疑問や、「まちづくり」という視点から参加者に感じて欲しいのは地域の方の想いや姿なのではないかという思いが自分たちの中で起こったことにより今一度ツアーの企画目的・意図を考えました。そして、参加者と地域の方のダイアログを大切にしながら、ツアーによって自分たちができることは何か、原点に立ち返りました。そのように進めて行く中で、ツアー当日、参加者には震災後の福島の様子を知ってもらうと同時に、もともと東和地区が持つ地域性についても感じてもらうことができたと思っております。これまでのツアーや今回のツアーで、改めてスタ☆ふくのツアーというのは、参加者や地域の方の思いに対して意識の変化やきっかけに働きかける存在になりうる可能性があることを認識することができました。地域の方から福島で生き

ることへの誇りであったり、生きがいの発見の場になっているというお声をいただけたことも嬉しかったです。また、参加者の方には「福島」という土地での原体験によって、福島に対するイメージの変化につながり、被災地福島という側面だけではなく、福島の地域性というものを感じていただけたと思っています。ツアー当日、地域の方と参加者との分科会において、地域の方が流した涙を私は忘れることができません。震災後、この地域でこれからも生きていく覚悟を決め、皆で前に進んでいこうとしたからこそ、一人ひとりが地域を作っている姿があることを、同じく福島で生きている私たちはこれからも発信していきたいと強く思いました。

またそれと同時に、震災以前から地域住民の方が主体的に地域づくりに関わっている地域だからこそこの土地の「地域活性」という概念をスタ☆ふくはどのように持つべきなのか、再認識する機会にもなったのも事実です。

「福島」で起こっている問題の情報発信だけではなく、震災以前より体制が整っている二本松地域では、さらなる事業展開も視野に入れていくべきだと思っております。ツアーという手段による人々の考えや思いの変化といったソフト面へのアプローチ、体験主義による魅力創出や情報発信の可能性をこれからも模索しながら、ツアーのその先を見据えた団体の行動指針を考えていきたいと思っております。

この度のツアーは私を始めとし、2年生のメンバーでプロジェクトチームを構成し企画実施してまいりました。また、昨年からのツアー継続のお声もいただき開催が3度目になる等、団体の多くの側面において、今回のツアーは大きな転換、きっかけになったと思っております。今回のツアーによって成し得たこと・そうでなかったこと、またスタ☆ふくと地域との関係性といった多くの発見や学びを今後のスタ☆ふくの指針に活かしていけるよう、これからも真摯に考えてまいりたいと思っております。

この度のツアーにご協力いただいた二本松の皆様、福島交通観光の皆様、そしてツアーにご参加下さった皆様はこの場を借りて御礼申し上げます。今後も、誠心誠意活動に取り組んでまいります。今後ともスタ☆ふくを何卒よろしくお願いいたします。

福島大学2年 まちづくりツアー2013 担当  
鈴木晴香

私は今年の5月にスタふくに入りました。今回ツアーを担当した二本松市東和地区は今まで20年間福島市で生きてきた私にとってあまり関わったことのないところで、そんな私がツアーメンバーとして、ツアー当日までどれだけ東和のことを知れるのか、参加者の方に伝えることができるのか、とても不安でいっぱいでした。

実際に二本松市東和地区に下見として行ってみると、そこは何故今まで自分が知らなかったのだろうと思うほど魅力が多い土地でした。観光として、農業として、この土地でできることを考え、住民同士が協力して行っている様々な活動を見せていただき、ツアーメンバー全員が参加してくださる皆さんに伝えたいと思ったこと。それは、住民同士で助け合い協力する心「結の精神」でした。

しかし、人の魅力・心を伝えるという事はとても難しく、さらに参加者の皆さんが関われる時間は2日間ととても短く、私たちがやろうとしているツアーを企画するということがどれだけ大変なことか、そこでやっとわかった気がしました。

それからコンテンツの内容を練ったり、SNSでの文章を考えたり、試行錯誤の連続でした。与えられた期間での広報については反省点が多々あり、次のツアーに伝え確実に改善しなくてははいけないと思いました。

ツアー当日、一番思ったことは「このツアーに関われてよかった」ということでした。参加者の方が様々なコンテンツを通して、東和を知り、好きになっていくのが目に見えてわかり、2日目の分科会では東和について真剣に考えてくださっているのがわかったからです。私たちがツアーに来て感じてもらいたいと思ったこと以上のことを参加者の皆さんは感じてくれました。

今回のツアーを通してこれから自分がしなくてははいけないと感じたことは、継続して東和地区について考えること、福島のほかの地域にも目を向けて様々なことを考えることだと思いました。福島の様子はこれからどんどん変化していきます。その現状を正しく伝えること、その中で常に努力し、活動を続ける人がいること、そういったことを私はスタふくメンバーの一員として伝えていきたいと感じました。

今回、ツアーが無事催行できたのは、東和地区の皆様、参加者の皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

福島大学2年  
國分花菜

高校生の時に震災を経験し、「福島のために何かしたい、福島にいるからこそできることがしたい」と考えた私は今年の4月にスタ☆ふくのメンバーに加わり、二本松ツアーを担当することとなりました。

私は福島県出身者でありながら、最初に二本松市東和地区と聞いたときには正直「田舎」というイメージしか浮かびませんでした。しかし、ツアーに関わっていく中で、私の二本松市東和地区に対するイメージは大きく変わっていききました。

私は東和地区の魅力は何よりも「人」にあると感じています。東和地区の方々はとても温かく、いつも私たちを笑顔で迎えてくださいました。また、地域の方々はお互いに様々なところで結びついていて、東和地区に昔から根付く「助け合い・協力」を意味する「結」の精神を大切にしながら、地域一体となってまちづくりに取り組んでいます。

ツアーの準備をしていく中で、「この東和地区の魅力はどうやったら参加者の方に上手く伝えられるのだろうか?」、「このツアーを通して自分は何ができるのだろうか?」といった迷いや不安、様々な葛藤がありました。そのため、ツアーの最後の振り返りで、多くの参加者の方の口から、私たちが伝えたかった東和地区の魅力である、人の「温かさ」、「繋がり」、「主体性」という言葉が聞けたときは、安心とともに何にも代えがたい喜びがありました。

また、私が東和地区を直接訪れることによって、その魅力に気づくことができたように、直接足を運んでみないとわからないことはやはりたくさんあるなと感じました。震災から二年半がたった現在でもなお福島県は風評被害に苦しんでいます。私は風評被害の多くは「福島＝危険」というイメージだけで語られている部分が多いと感じています。だからこそ、現地に直接足を運んでもらい、その本当の姿や現状を知ってもらおう。このことが大切であると改めて感じたのと同時に、自分自身の中でスタディーツアーの意義であると感じることができました。

今回のツアーには自分自身、反省点も多々あります。また、自分が伝えたいことを人に伝える難しさも感じました。今回得られたこの貴重な経験、反省を踏まえ、福島との関わり方を自分なりに模索しながら、今後も活動していきたいと思います。

最後に今回のツアー関わって下さった、地域の方々をはじめ参加者のみなさん、全ての方々にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

まちづくりツアー担当  
2年 山川幸史

## ＜今回のツアー価値・評価＞

2013年9月10日ツアー反省会より

自分たちがツアーを実施することにより、どのような「価値」を提供できているのか、以下に述べていきます。特に、二本松地域ではこれまで継続してツアーを行ってきています。ツアーによってどんなことが成し遂げられているのか、またツアーでなし遂げられなかったことは何か、また今後の継続していく意義も含めながら、主に参加者・地域の視点から考えました。

### ■本ツアーによってなし遂げられたこと

#### (1)地域にとって

- ・福島現状を発信できた
- ・震災以前から根付く地域の魅力が伝わった
- ・福島、二本松で生きることの誇りの醸成
- ・ツアーという場が地域の方が挑戦し、「生きがい」を見いだせる場所になっている
- ・地域に生きる人のストーリーを持たせて、福島の魅力を発信できる

#### (2)参加者にとって

- ・福島の地域で異なる震災の影響を知らせることができた
- ・個人として福島に対するイメージの変化、「被災地イメージの変化」
- ・今後も福島、東和を応援していきたい気持ちの醸成
- ・地域の問題に対して積極的に関わっていく気持ち、意見を出すようになった。

### ■本ツアーによって成し得なかったこと

- ・ステークホルダーの中でも、地域活性に関するアイデア創出、ツアー参加者からの具体的な地域の良さ・特徴の提示を望んでいた人がいたが、全ステークホルダーのニーズをツアーに組み込むことができなかった。
- ・ツアーに来た人にしか変化を与えることができず、外部にまで情報発信していくことが難しい。体験主義。
- ・参加者が今後、地域にどのように関わっていくのか、具体的行動めで提示することができない。
- ・地域におけるツアー効果の提示

## ■今後のツアー展開と二本松地域との関わりについて

二本松市東和地区というのは、地域主体で町おこしを行っており、外部団体の研究機関とも多く連携しながら活動しています。スタ☆ふくと一緒にツアーを行うのは3度目ですが、今後はスタ☆ふくならではの活動や存在意義をより一層発揮していくべきだと考えております。まず、今回のツアーで見えてきたことは、「東和における地域活性とは何か」ということです。これまでも地域の方にはツアーに対する好評は頂いており、継続はできていますが、地域の方のご協力が多い地域だからこそ、地域の方の活性のイメージ・ニーズは様々です。これまでのツアーでは地域の情報発信に重点を置いてきましたが、地域への具体的アイデアとしてのフィードバック等、目にみえた変化はなかなか生まれてこないのが現状です。地域にとって、スタ☆ふくはツアーという手段のみで関わっていくべきか、という議論も生まれました。また、それと同時に地域に貢献していくためのツアーとは何か、ツアーの質やスタ☆ふくのこれまでの地域に対する姿勢についても問題提起することができました。地域のステークホルダーとツアー参加者のターゲット層のマッチング、これまでのツアーを見直したうえで、地域・参加者にとって最善となるツアーをパッケージ化する、また地域のことを発信していくうえで、自分たち自身が地域の様子についてより一層学んでいくことが大切といったさまざまな意見が多く出ました。二本松市東和地区というのは、地域自身で地域活性について考え、実行していく地域であるため厳しい言い方をすればスタ☆ふくだからこそできることを積極的にアプローチしていかなければ、地域にとって「ツアーによって変化をもたらしていく」存在になるというよりは、「ツアー催行に協力する」スタンスは変わらないのではないかと考えます。今後は「福島」という土地でツアーを催行していく意義も含めながら、地域との関わり方も積極的に考えていきたいと思っています。



## 6. 広報・メディア掲載について

<宣伝方法・経緯>

7月4日	募集開始
8月19日	ツアー催行決定

- ・スタ☆ふく HP (<http://sutahuku.jimdo.com/>)
- ・Facebook ページ
  - …イベントページ作成、リレー投稿、参加希望者へコンタクト
- ・twitter アカウト (@study\_fukushima)
  - …準備の進捗状況やツアー告知などをこまめに発信
- ・スタ☆ふくブログ (<http://jasp-sutafuku.jugem.jp/>)
  - …事前下見の様子やツアーコンテンツの紹介などを写真と共に掲載
- ・テレビ局、ラジオ局、新聞社への取材依頼
- ・告知協力のお願ひ
  - －福島大学教授、ゼミ
  - －各大学のボランティアサークル、学生団体、海洋系の学部
  - －震災復興、ボランティア、観光、グリーンツーリズムに関連する団体
  - －NPO 法人等のメーリングリスト
- ・福島大学構内でのビラ配り
- ・スタッフの知人を通じた告知
- ・首都圏でのチラシ設置（シェアハウス、レストランなど）

# 「今の福島」肌で感じて

## 観光庁東北ブロック賞に コンテスト

### 福大学生有志がツアー企画・実行 スタ☆ふくプロジェクト

### 2013 今と生きる

福島大の学生有志による団体「スタ☆ふくプロジェクト」は東日本大震災、東京電力福島第一原発事故からの復興を目指す本県の「今」を県外に発信しようとする独自の旅行ツアーを企画・実行している。取り組みは観光庁のコンテスト「今しかできない旅がある」で東北ブロック賞に輝いた。メンバーは男女学生十七人。被災地復興を目的に設立された全国規模の学生団体「JASP」の参加者を中心に結成した。メンバーは本県への現状認識が県内外で温度差があると感じ、プロジェクトを旗揚げした。ツアーの企画は福島交通観光などの助言を受けたが、メンバーが考えた。ツアーのテーマは「今の福島を見て、聞いて、感じてほしい」。地域の人との



次回のツアーに向け企画を練る代表の吉田さん(左)ら「スタ☆ふく」のメンバー

触れ合いを重視した内容とした。昨夏から今冬にかけて四コースを企画し、県内をめぐり、二本松市では東和地区を訪れ、生産者と一緒にナスやトマトなどの野菜を収穫した。その野菜を使ったカレーライスを夕食に味わった。

代表を務める吉田哲朗さん(二)人間発達文化学類四年は「ツアーに参加した人が県産食材を買ってくれるようになった。福島へのイメージを変えられたと思う」と話した。今後は南相馬市へのツアーを設けるなど一層の情報発信に努める。

◇ コンテスト「今しかできない旅がある」の表彰式は二十七日、都内の国土交通省で行われ、代表の吉田さんらメンバーが東北ブロック賞を受け取った。

### 「スタ☆ふく」にブロック賞

#### 観光庁 風評払拭ツアー 評価

観光庁は十九日、若者(旅行)を促す取り組みを表彰する観光庁長官賞に、利用者同士で旅行プランをつくるインターネット交流サイト「tripiace(トリッピーズ)」を選んだと発表した。

利用者が旅行プランを提案、賛同する人たちと内容を詰め、参加者を募集する。人数が集まれば同社が旅行代理店を紹介してツアーを実現する。「アマゾン川でピンクのイルカと遊ぶ」といったユニークなツアーが多く企画され、計約八千人が参加した。

この他、茨城県大洗町を舞台にしたアニメの制作を町へのツアーとセットで企画した「Oaraiクリエイティブマネジメント」など三団体が奨励賞を受賞。四団体がブロック賞に選ばれた。

本県からは、福島大の学生が主体の「スタ☆ふくプロジェクト」が東北ブロック賞に選ばれた。

本県に対する風評払拭(ふっしょく)のため、県内各地の関係者と連携し滞在プログラムツアーを企画、参加を広く呼び掛けた点などが評価された。

アサヒとユニービール共同開発 25日に発売

流通大手のユニークグループ・ホールディングスは十九日、アサヒビールと共同開発したプレミアムビール「アサヒクラシックプレミアム」を二十五日に発売すると発表した。ドイツ産ホップと麦芽100%を使用し、価格は三百五十円(税別)二百五十円。

東海地方を中心とし

電話のかけ直し込み  
0120-026-999  
F 042-43-2134  
F 042-656-2313  
E 042-624-0061

諸願祈願  
**鹿野山神野寺**  
☎ 0439(37)2351



## 漁業・農業 触れ合い体験ツアー



地元漁業者 藤沢史記を導く漁業の若手たち 福島の  
地元漁業者 藤沢史記を導く漁業の若手たち 福島の

# 都民に見せたい福島

震災から三年目の夏、都内の人に福島県を訪れ、福島の今一を五感で感じて取り戻してほしい。福島大・福島市の学生が、そんな思いで体験ツアー「スタスタ」を企画した。八月下旬から九月下旬、県内のいわき市と本松市で催す。東京を中心に多くの参加者を募集している。(山田阿志)

**地元大学生企画「顔見えるつながり」を**

首都圏の人に被災地、福島に来てもらうという企画は昨夏、始まった。延べ八百人以上が参加し、地元の人声や思いに届けてきた。今回は二つのツアー「いわきの漁業と二本松市の農業」をテーマに、漁業や農業に携わる人たちが、一日で交流する。

いわき市ツアーは八月二十四、二十五日に行う。漁船に乗って体験や、復興したなまほろ工場を見学、原発からの汚染水漏れで漁の再開時期が見通せない漁業者の切実な声にも耳を傾ける。

二本松市ツアーは九月七、八日。有機農業の盛んな東和地区を訪れる。地区には浪江町の避難者も多い。震災後に新設した「ナリ」を見学し、野菜収穫体験する。宿泊先は地元元の家だ。

企画した福島大四年生田島陽さん(三)は「参加しただけで、福島の住民と顔が見えるつながりを作ってほしい」と話す。いわき市は延べ三十八人で、二本松市は延べ四十八人で、九千五百円(車費別)は二万円。問い合わせ先は福島交通観光課(電話024(53)18950)。

▽テレビ

- ・ 8月25日(日) NHK 総合 全国ニュース「福島漁業の現状見学ツアー」

▽ラジオ

- ・ 7月15日(月) mot.com もとみや  
「元気！前進！ふくしま希望ラジオ」生放送
- ・ 7月16日(火) ラジオ福島「復興情報ファイル」生放送
- ・ 7月17日(水) FM 会津 生放送
- ・ 7月24日(水) FM 会津 生放送
- ・ 7月24日(水) FM ポコ  
「みんなのラジオ～FUKUSHIMA TOWN VOICE～」生放送

▽インターネット

- ・ ワカツク「東北1000プロジェクト」  
<http://www.tohoku1000.jp/projects/detail/?id=217>
- ・ 政府広報「響け、広がれ！復興のつち音」  
[http://www.gov-online.go.jp/cam/fukko/radioplayer/fukushima.html?id=motcom\\_20130724](http://www.gov-online.go.jp/cam/fukko/radioplayer/fukushima.html?id=motcom_20130724)

## 7. ご協力いただいたみなさま

[共同企画]

スタ☆ふくプロジェクト

[旅行企画実施]

福島交通観光

[協力]

あぶくま農と暮らし塾/ふるさとネットワーク TOWA/ハーモニー/ゆうきの里東  
和ふるさとづくり協議会/ふくしま農家の夢ワイン



—ツアーにご協力頂いた地域の皆様とスタッフ—

このプロジェクトは 住友ユースチャレンジ・プログラム助成対象事業、  
福島県「いいね！ふくしま」PJ委託事業としてご支援をいただいております。

今しかできない旅がある  
**若林**

2013年6月には、福島県復興のために地元若者が県内外の多くの若者を巻き込んでツアーを実施している点が評価され、「第1回若者旅行を応援する観光庁官賞・東北ブロック賞」を受賞しました。

## 8. 総括

昨年の8月に初めて実施したスタ☆ふくのスタディーツアーも今回で6回を数えるに至りました。二本松での開催は3回目となります。こうして一步一步ツアーを積み重ねられているのは、毎回多くの方々のご協力いただいているおかげであります。このように多くの方から協力いただいているスタ☆ふくのツアーは、実施している私たち自身誇らしく思うものであると同時に、反省・改善点を見つけ、次回へ活かすということが求められているものと感じています。

私たちのビジョンは、「地域を活性化させる旅行の成功事例として存在感を發揮する」というものです。これが意図するところは、ツアーを通じて地域住民の主体性を引き出し、住民自身の手によって地域がより良くするための活動(アクション)を起こしていくということです。今夏実施したいわきツアーにおいて、ツアーを通して地域住民のモチベーションを上げることはできても、意識を変え、行動の変化に結びつけることは容易でないという結論に今回至りました。もちろんこれらの結論は予想できていたものではありませんが、団体内での一致した認識として結論づけられたことは私たちとして大きなことです。今後、スタ☆ふくはツアー事業を引き続きクオリティの高いものを求めながら継続していくことに加え、地域おこしのアイデアコンテスト等ツアーに限らず形を変えながら活動を展開していくこととなるでしょう。

今回のツアーが、東和をはじめとする二本松周辺地域の方々にとってどのようなものになったのかが、私たちが最も注視し、配慮をすべきポイントです。二本松でのツアー開催は、3回目と着実に回数を重ねていますし、これらからもスタ☆ふくではツアー催行の筆頭候補として名をあげられる地域です。今回の催行に関して、ツアーを継続するという私たちのスタンスを見せられた成果を感じる一方で、効果や意味を見出さないまま続けているだけの企画に意味はないと自負しております。参加者の方々にとって、「福島の実情」を体感いただけたことも大きな成果です。今回は特に東和地区の方々の持つポテンシャルの高さについて、多くの人に知ってもらえる機会になったと思います。その一方で、地域住民の方々にとってスタ☆ふくのツアーはどうあるべきなのか、団体内にとどまらず、実際に地域の方々も巻き込んで議論をしていくべき点だと考えています。まずは、東和が「どうありたいのか」というビジョンを福島大学という比較的近い位置にいる私たちスタ☆ふくと共有し、学生ながらにどのような関わり方ができるかを真剣に考えていくべきと思っております。

最後に、この場を借りて代表として最後の挨拶をさせていただきます。本団体は、私が「同世代の多くの学生に、福島のリアリティを体験させたい」という思いから一念発起し、本当にたくさんの地域の方々、支援者の方々にご協力をいただきながら形にしてまいりました。発足当初抱いていた思いは忘れることなく、かつ活動を続けるうちに、スタ☆ふくがなすべきと思えた「地域の主体性ある活動を生み出し、応援する」という夢は半ばではありますが、後輩にこの思いを託して卒業を迎えることとなりそうです。

これまで多大なご協力を頂いてきた関係者の方々へ御礼申し上げます。特に、スタ☆ふくを生むきっかけをくださり、ずっと相談に乗ってくださった **Link with** ふくしま代表(当時)で、現在(株)Plainnovation 代表の菅家元志様、プロジェクト発足後ご支援・ご協力を頂いた福島交通観光(株)の支倉文江様、佐藤宗様には頭が上がらないほどありがたいご指導・ご支援をいただきました。スタ☆ふくを始めた当初の私にとってまともに企画書を書くことすら初めての経験であり、0からのスタートでした。こうして活動を続けることができているのも、素晴らしいメンターに囲まれたおかげです。本当にありがとうございました。

地域の方々に対しても、この場で御礼を申し上げます。本団体はまだまだ未熟な学生の集まりではありますが、皆様との関係性をもってこれまで活動を続けることができました。これまでの多大なご協力に感謝申し上げます。また、これからも地域のパートナーとなれるよう努力を続けていくことと思います。

最後に、この活動は全国学生プロジェクト (JASP) 時代から一緒に活動をする仲間があつてのものです。リーダーとして不甲斐ない面もある私と一緒に活動をしてくれた仲間感謝を示し、あいさつとしたいと思います。

発起人が抜けた後も、本団体は活動を続けていくことになります。今後とも何卒、ご指導ご鞭撻を含めスタ☆ふくを応援してくださると幸いです。

2013年9月  
代表 吉田 哲朗

## 9. お問い合わせ先



### スタ☆ふくプロジェクト

代表：吉田哲朗

住所：福島県福島市金谷川1

福島大学学生課 スタ☆ふくプロジェクト 宛

Mail: [suta.fuku@gmail.com](mailto:suta.fuku@gmail.com)

HP: <http://sutahuku.jimdo.com/>

ブログ: <http://jasp-sutafuku.jugem.jp/>

### 編集

「スタ☆ふく」プロジェクト まちづくりツアー2013 担当

福島大学 人間発達文化学類 2年 鈴木晴香 (プロジェクトマネージャー)

福島大学 経済経営学類 2年 國分花菜

福島大学 経済経営学類 4年 山川幸史

福島大学 人間発達文化学類 4年 吉田哲朗 (団体代表)